

空



2007年

**SORA** 20号

晴夜 (20) | 2

柴田 佐知子

穴に入る林檎すすめし蛇もまた

肌をもてつつまれて月待ちにけり

厨への廊下きしみしころの月

音のする方を赤子が見て良夜

蛤となれぬ雀が寺に群る

白桃受く赤子授りたるやうに

村中の案山子にとどく弥撒の鐘

丈なして誰も容れざる芒原

飯住まひ

服部 早苗

秋暑し飯の住まひの皿・小鉢

漂白のまないた乾く遠かなかな

早稲の香や老犬の綱ゆるやかに

抜け道のむかし農道秋なすび

秋草に秋草めいて坐りけり

地鎮祭三句

神官のさはやかに息遣ひけり



えいえいと地を掘るしぐさ 鰯雲

時計回りに供ふる 榊秋気澄む

食堂車のランプ過ぎゆく九月尽

カレー南蛮すみやかにくる 秋日和

天高し砂場に並ぶ土団子

新藁の芯の太きをたのみとす

ふかし諸はにかむことをおぼゆる子

熟れ柿に入日大きく西浦和

種採もせずうつし世を軽くをり

仮住まいになって三ヶ月過ぎた。

とりあえずという、何となく落ち着かない日々の中にも、いつもとは違う目新しさがあつて、それはそれでおもしろい。

三階から見ると空の近さ、広さ。

夕焼の美しさ。月の美しさ。

時間どおりには来ないバスが、ずっと

先の方に見えた時の安堵感。

胡麻の花の優美な色合い。

ねこじやらしの丈の長さ。

すこし田舎らしさが残っているこの仮

住まいのゆつたりした時間もまた、貴重

な体験と思う。

二重瞼

秋  
千  
晴

閣僚の釣瓶落しの人事かな

赤い羽根つけてもらふ子胸をはる

きつぱりと話つけたる酸橘かな

夕焼けの鶏のとさかの色褪せし

めはじきのはじけて二重瞼なり

秋雨も子の言ひ分も筋のあり

横腹の出張りし子犬秋高し

大粒の栗をしばらく握つてみる

月も入れ阿蘇高原の茶会かな

冬瓜をいつ切らうかとまた見やる

私の周りには今、親の介護に時間を費やしている人が沢山居ます。

人間は独り立ちできるまでに一番時間のかかる動物です。そのために親から沢山の時間をもらいながら成長します。その子がやっと一人前になった頃には今度は親の介護です。だんだんと時間がなくなってきたる親に今度は時間をあげることによつて少しでも長生きしてもらいたいと介護に費やすのです。

そして最後は夫婦です。お互いに残り少なくなつた時間を分かちあいながら費やしていきます。

私はいつも夫を送るとき、車庫のシャッターを二人で力を合わせて上げます。その時「人」という文字を思い出します。

## 正直

## あさなが捷

山の田の並ぶ案山子に脅さるる

懊悩の赤き塊まんじゆしやげ

日あたりのよくてしあはせ吊し柿

赤ん坊の頭ほどある梨おそろし

無口にて安らいである秋日和

今更に父と食べたき熟し柿

正直に生きて肩凝る睦月かな

ブレハブに弥生の土器や冬董

大寒の夜の底なる轍かな

母のこと思へば指と薄氷と

社会人になってから入学した大学で出会った友達が、東京から戻って来た。私とはタイプが全然違うのだが何故か気が合う楚楚とした美人だ。二十二年の空白を埋めるべく、手始めに太宰府の九州国立博物館に、プライスコレクション・若冲と江戸絵画展を見に行った。

江戸の画家のコーナーに勝川春草筆『二美人図』があった。遊女二人が窓辺で寛いでいる絵だ。一人は巻紙に手紙をしたため、一人は立ってそれに目を落としている。外は山桜が盛りで、遠くの堤に帰っていく駕籠が小さく描かれている。解説には後朝のひと時とあるが、遊女は名残を惜しんでいるように見える。

そこで横にいた友達に私は「やれやれ、という感じ?」と聞いてみた。間髪をいれず「そうね、でもすぐに次のお客がやって来る」との答え。ふたり同時に笑い出した。こんな会話は誰とでもは出来ない。こう言えばこう返してくる、この間合いは元のまま、一気に昔に戻ったと感じた。楽しい日々がまた始まりそうだ。

## 火の粉

小林 朱 夏

闘牛の傷に焼酎吹きかくる

名札付け農作業体験牛膝

知恵の輪の外れてよりの秋思かな

表札に同姓多し実南天

新藁の敷物荒き奥の宮

夜神楽の火の粉客までふりかかると

里神楽去年の鬼が姫となり

親友となりし夫ぬて去年今年

電線を弾ませてゐる初鶉

南国の凧揚げどこも海のあり

青年ジョニーは戦場で負傷し、鎧戸のある部屋のベッドに額を少し見せて、全体をシートに覆われている。

ここはどこだ。時間は、僕はもうなかったのか。ジョニーは少しずつ理解する。下半身と両腕を失い、残っているのはわずかな脳と額と胸の皮膚感覚のみ。優しいナースに変わり、婦長の計らいで、鎧戸が開けられると空気の振動や温度の変化が、ジョニーに伝わる。ある日、ナースはジョニーの胸に MERRYCHRISTMAS と指で書く。ジョニーは歓喜に震える。ああ、今日は十二月二十五日。ありがとう。これからは月日がわかる。ジョニーはなんとかして、自分の思いを伝えたいと考え始める。布の下で、上下に動く顎に気付いたナースは、軍医等と通信員を呼んで来る。ジョニーの額にモールス信号を打つ。

通信員 あなたの希望は？

ジョニー 殺してくれ

通信員 ダメだ

ジョニー サークスに入れてみんなに見せてくれ

通信員 ダメだ

ナースを残して、全員退室。ナースが静かに、だが全身の力で生命維持のチューブを押さえる。ジョニーはありがとうと感謝する。そこに軍の高官が戻って来て、ナースを遠のけ、モールス信号を打ち続けるジョニーに鎮静剤を注射し、鎧戸は閉められた。

映画「ジョニーは戦場へ行った」のあらすじである。反戦映画であるが、常に人は人と自由にコミュニケーションを持ちたいと願った、ジョニーの叫びが強く印象に残った。



# 空 作 品 抄

柴田佐知子抽出

林檎赤し嫌ひなものは捨ててゆく

福岡

高倉 和子

朝の道夕日の道の野ばらの実

東京

中田みなみ

ちちははの骨を思へり雁の頃

長崎

荒井千佐代

秋草に秋草めいて坐りけり

埼玉

服部 早苗

めはじきのはじけて二重瞼なり

粕屋

秋 千 晴

正直に生きて肩凝る睦月かな

福岡

あさなが捷

里神楽去年の鬼が姫となり

糸島

小林 朱夏

朝より全き空や冬の鳶

須恵

苑 実 耶

朝顔や今も大事に子の日記

うきは

高倉恵美子

地芝居の悪党声を張りどほし

福岡

樋口みのぶ

鴉鳴くや村一番の高い木に

福岡

青山 悠

神の水受くるに露の杓ひとつ

行橋

安武 晨子

原爆忌舗装いちまい下は土

長崎

鳳 蛮 華

ぼつかりと空いた座席に秋の声

福岡

星原悦子

新蕎麦や太き書体の幟立て

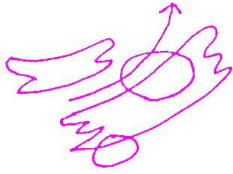
福津

野畑小百合

さくらんぼいまさら恋の噂など

羽曳野

鎌田 高暢



還暦の男と女天の川

カーテンの揺れて家中秋めきぬ

酔ふごとく花野と声にしてゐたり

子規庵に正座のひとつき水引草

秋うらら鯉の頭が海を押す

露座佛の胎内拜す冷やかに

片蔭をその日の糧のみ購ひ帰る

秋海棠柱目揃ひし長廊下

逢ひたきは逝きし人たち星月夜

青瓢重きに耐えて下がりをり

曼珠沙華道いつぱいの登校児

藁塚の香をすぎ一の大鳥居

子と共に去りし大きな夏休み

海へ出る水の片寄る野菊かな

光る尾を日向に残し蜥蜴消ゆ

晩学の鉛筆削る夜のちちろ

福岡

中条さゆり

神戸

石川 叔子

大阪

青木 朋子

東京

田島 洋子

福岡

吉村 摂護

福岡

大地 真理

福岡

ふじの 茜

福岡

桜三 奈子

横浜

小川 涼

福岡

田代 貞枝

萩

岸 千手

大阪

堀江 恵子

東京

荻 悠子

神奈川

及川 木栄子

東京

森 裕子

東京

山田 正子



秋うらら広き芝生のクラス会

東京

遠山のり子

雁渡る浮き棧橋に灯のともり

神奈川

上村和子

自然薯の掘りあげられし山の声

北九州

片田理枝

合歡の花ふはふは故郷穩やかに

福岡

矢野百合子

夕紅葉この地に下りし天女あり

福岡

犬丸勝子

暁や丈それぞれに蓮の花

福岡

葉山美香

華麗なる稲妻ひとりの指を組む

鎌倉

永原朱

胃袋をカメラが覗く大暑かな

東京

今井春生

露霜を踏んで下りし北穂高

佐賀

堤堅策

麴粉笑つて噴いた母のこと

北九州

毎熊美智子

ささやけば嬰うなづいて秋桜

福岡

浦川末子

ころがつてにこにこ笑ふ栗拾ふ

福岡

川崎よしみ

黄落や我を支へて杖細る

福岡

神谷耕輔

営業のカバンが越ゆる紅葉山

宇美

内藤玲二